六月八日付書状

なをなを、留守と申、旅と申、かたがた御扶持、申ばかりなく候。

御文くわしく拝見申侯。兼又、此間寿椿を御扶持候つる事をこそ申て候へば、これまでの御心ざし、当国の人目実、是非なく候。御料足十貫文、受け取り申候。又不思議にも罷り上りて候わば、御目にかかり、くわしく申承候べく候。又、状に鬼の能の事うけ給候。是は、こなたの流にわ知らぬ事にて候。仮令、三体の外は砕動までの分にて候。力動なんどわ他流の事にて候。ただ、親にて候し者の、時時鬼をし候しに、音声の勢までにて候し間、それを我等も学ぶにて候。それも、身が出家の後にこそ仕て候へ。めんめんも、この能の道をさまり候て、老後に年来の功を以て鬼をせさせ給侯わん事、御心たるべく侯。また、このほど申候つる事共、大概しるして参らせ候。よくよく御覧候べく候。不思議のゐ中にて侯間、料紙なんどだにも候わで、聊爾なるやうにか思し召され候らん。さりながら、道の心は妙法諸経の御法をだに藁ふでにても書くと申候へば、道の妙文わ金紙と思し召され候べく侯。なをなを法をよくよく守せ給べく候也。

　　　　　　　　　　　　　　恐恐謹言

　　　　六月八日

至翁　花押

金春大夫殿

　　　　　　　参

　　　　〆

金春大夫殿　　　　　　　　　世阿

まいる